

「どこまでも愛されるゆえに」

創世記 4 章 1-15 節

創世記 4 章のカインとアベルの物語は、人類最初の殺人事件を描きますが、その出発点は「礼拝」でした。二人はそれぞれの働きの実りを神にささげます。しかし主はアベルとその献げ物に目を留め、カインには目を留められませんでした。聖書はその理由を詳しく語りません。ただ聖書にはこう記されています。「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。」(ヘブライ 11:4)。「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません。」(詩編 51:19)。

神がご覧になるのは献げ物の種類ではなく、そこにある「信仰」です。神により頼む心、打ち砕かれた霊こそ、神が喜ばれるささげ物です。礼拝が自己満足や評価を求める場になるとき、私たちの心は知らず知らずのうちに神から離れてしまいます。

献げ物が認められなかったカインは怒り、顔を伏せました。神と向き合うことをやめ、心を閉ざしてしまうのです。しかし神さまは「どうして怒るのか」と語りかけ、再び神との関係へと立ち帰らせるために招いてくださっているのです。

けれども、カインはその神さまの呼びかけを振り切り、弟アベルを殺してしまったのです。これは、神のかたちに造られた存在を完全に否定する行為です。罪とは、神との関係を壊し、さらに隣人との関係を壊すものです。

私たちも、無視や言葉によって人を傷つけ、心の中で相手を消してしまうことがあります。それは殺人ではない、と言えるでしょうか。イエスさまは言われました。「兄弟に腹を立てる者は、だれでも裁きを受ける」(マタイ 5:22) と。わたしたちの中にもカインがいるのです。

殺されたアベルの血は地から叫び、裁きを求めました。しかし、聖書はもう一つの「血」について語ります。それは、十字架の上で流された主イエス・キリストの血です。アベルの血が「裁き」を求めて叫んだのに対し、キリストの血は「赦し」を求めて叫びました。十字架の上で主は祈られました。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と。

これが福音の極みです。私たちはみな本質的に「カイン」の側に立っています。本来なら、地の底から叫ぶアベルの血によって裁きを受け、滅ぼされるべき存在です。しかし、キリストは、私たちの代わりに「見捨てられる」という究極の裁きを受け、流された血によって、今や私たちを「赦された者」として包み込んでいます。

神さまは、弟を殺したカインを滅ぼさず、復讐から守るための「しるし」を与えられました。そこに裁きを超える神の憐れみがあります。そして、私たちに与えられた究極の「守りのしるし」こそ、十字架です。私たちは正しいから守られているのではありません。キリストが私たちのために呪いの木にかけられたがゆえに、今、守られ、生かされているのです。

受難節は、罪を知り、赦しを受け、愛へと立ち上がる期節です。十字架は、私たちの罪の現実を暴きますが、それ以上に、神の愛の深さを示しています。その愛に支えられて、回復された関係の中へと歩み出す者でありたいと願います。